

大変貌した修猷館周辺 (左端の道路が元の電車道)

写真提供…福岡市



東京修猷会

題字・松尾金蔵書
発行

修猷館同窓会東京支部

事務局

〒101 東京都千代田区神田須田町
1-2-1 カルフル神田5F
(株)フソウキャリアサービス内

破地獄の偈

東京修猷会会長 有吉 新吾

皆さん、明けましておめでとーございます。昨年は阪神の大震災やオウム教の凶悪犯行、景気の低迷など災厄の年でありましたが、今年には災害事故もなく、経済も立直り、国際貢献も出て、日本国民の品格が一段と良くなる年にしたいものと願っております。

さて、年明け早々に地獄のはなしとはどういふことかと思はれる向もあるかと思いますが、これから申し上げますのは題名も示します通り、地獄を破つてこの世に生還する、というはなしでありますから、どちらかといつてめでたいはなしであります。

もう数年前のことですが、ある集りで日頃尊敬しております実業界の某先輩から『破地獄の偈』という大変興味あるはなしを聞きまして、この先輩は絵画の道にかけては玄人はだしの大家で、かつて東大寺に籠つてその盧舎那仏を画かれたことがありますが、それがこのはなしに深くかかわっております。

はなしはその先輩が先年大病をされ、高熱のため意識朦朧として生死の境をさまよつておられた時、かつて画かれた盧舎那仏が忽然として枕頭に現出され、それから急に病勢はおどろえはじめ、めきめきと回復に向われたのであります。このことを後日親しくしておられる東大寺の管長に話されたところ、管長は、これは驚きました、それこそ『破地獄です』、と云つて

心如工畫師 (心は工みなる畫師の如く)
畫種々五陰 (種々の五陰を畫き)



有吉新吾・書

一切世界中 (一切世界の中に)
無法而不造 (法として造らざるなし)
にはじまる『百字心経』のはなしをされたそうです。

このはなしが妙に私の頭に残つて、それからいろいろ調べてみますと、『百字心経』とは華嚴經の夜摩天宮菩薩説偈品に出てくる百字から成る『唯心偈』のことであり、華嚴宗大本山東大寺では、大仏殿の『昭和修理』のために『百字心経』の納経を受けておられるということを知り、人を介して納経用百字心経を入手してその解説を読んでみますと、所謂『破地獄の偈』と称するのは、その末尾の四句、即ち、
三人欲了知 (もし人求めて三世一切仏を)
三世一切仏 (知らんと欲せば)
應當如是觀 (應當に是の如く觀すべし)
心造諸如来 (心は諸の如来を造ると)
のことだといふことが分つたのであります。

ところでこゝまではいいのですが、何故これを『破地獄の偈』といふのか、これが中々分らないまま長い間気にかかつておりました。不思議なもので、しよつちゅう心に掛けておりますと小さな記事でもヒョイと目に飛び込んでくるもので、最近ある雑誌にこの『偈』のはなしが出ておりました、『破地獄』のいわれは『今昔物語』巻六に詳しいとあります。早速今昔物語を繰り、左の通りの讀み説話を発見いたしました。は、全くやれやれという思いをいたしました。

震旦王氏、誦華嚴經偈

得活語 第三十三

今ハ昔、震旦ノ京師ニ人有ケリ。姓ハ王ノ氏、戒行ヲ持セズシテ善ヲ修セズ。文明元年ト云フ年、王氏、身ニ病ヲ受ケテ忽ニ死ス。而ルニ左右ノ脇腹力也。三日ヲ経テ甦リヌ。身ヲ大地ニ投ゲテ泣悲ムデ冥途ノ事ヲ語リテ云ク、『我死セシ時、二人ノ冥官来リテ我ヲ追テ地獄ノ門ニ至ル。其時二人ノ沙門来リテ我ニ告ゲテ云ハク、我ハコレ地蔵菩薩也。汝京師ニ有リシ時、我形像一鉢ヲ模シタリキ。而ルヲ未ダ供養セズシテ投ゲ棄テキ。然リト雖我像ヲ模セル恩ヲ報ヒムト思フ、ト宣ヒテ一行ノ偈ヲ王氏ニ教エテ誦セシム。其文ニ云ハク。若人欲了知 三世一切仏 應當如是觀 心造諸如来 云々。沙門此偈ヲ教エ終リテ宣ハク、此ノ偈ヲ誦ズレバ

地獄ノ門ヲ閉ヂテ淨土ノ門ヲ開ク也。ト。王氏既ニ此ノ偈ヲ受ケ得テ遂ニ城ニ入リヌ。閻魔王在シテ問ヒテ宣ハク、此人如何ナル功德力有ル、ト。王氏答エテ曰ク、我愚癡ナル故ニ善ヲ修セズ、戒ヲ持セズ、但一四句ノ偈ヲ受持セリ、ト。王宣ハク、汝今誦シテムヤ否ヤ、ト。王氏習フ所ノ偈ヲ誦ス。其時二音ノ及ブ所ノ罪人、皆遁ルル事ヲ得ツ。王モ亦此偈ヲ誦スルヲ聞キ給ヒテ、恭敬シテ、『速カニ二人間ニ還リヌ、ト宣フ。』此故ニ我甦ル也。ト云フ。其ノ後諸ノ僧ニ向ヒテ此ノ事ヲ語ル。然レバ華嚴經ノ功德無量也。一四句ノ偈ヲ誦セル猶此ノ如シ、如何ニ況ンヤ解説シ書寫供養セラム人ノ功德ヲ思ヒ遺ルベシトナム語リ伝エタルヤ。

さて話は以上の通りで、『破地獄』の由来は分つたのであります。が、『唯心偈』は心が凡ての基本であり萬物の実体である、と説いている華嚴宗のエキスともいふべき大変むつかしい唯心のお経ですけども、閻魔大王がこれを知りて、『参りました』とどうして平伏恭順するのか、どうもそこが分りません。もとよりこれは廣大無辺の仏の功德に降参した、と常識的に解釈していいのでしようが、どうもそれだけでは納得がいけないものがあるのです。そこで華嚴教に関する本をあれこれ拾ひ読みしてみますと、華嚴宗本尊の盧舎那仏は西アジアの太陽信仰のシンボルで、釈尊の不滅の本体を『太陽』になぞらえたのだ、という説があり、またそれにつながるのというのが華嚴經はその教理から死後の世界とか地獄の存在など一切問題にしないという説もあることを発見し、さてこそ『華嚴偈』が『破地獄』につながるのか、と想像を逞しうしているのが現状です。しかしこれも私の身勝手な推測でしよう。大方のご教示をいただければ幸いです。



二月 広中 平祐
数理科学振興会理事長

◆「曖昧について」

—全国から高校生を五十人、論文で選んで、海外からノーベル賞受賞者や著名な方々を招いて一週間寝食を共にし勉強しあうセミナーを開いておられます—

数学をやっていると「厳密」ということが非常に重要ですが、その対局にある「曖昧」というこ

’95二木会から
講演抜粋



撮影・大森正憲氏(S29卒)

とに非常に関心があるわけですから、ファジー、カオス等昔あまり考えなかったようなことを考え出したコンピュータの発展と関わりがあります。コンピュータというものは、実は曖昧なのです。どんな完璧な機械でも少しは誤差が出るわけで、出てくる間違ったようないろいろな安全弁がついているわけですね。

日本の地図を厳密に描きたいという場合、海岸線をずつと歩いていて描いていたら、描き終わった頃にはどこかへずれて来ることもありうる、見るということは細部を無視してこそはつきり見える—アナログの特徴なのです。数学者の仕事の中へも、コンピュータ・グラフィ

造性の扉がフと開く、全体の雰囲気をよくして、出てくる流れ星を待つ、という訳です。数学者ポアン・カレールは、創造的なことはきのこに似ていると言っています。菌根という根がずつと円形に地下で広がっていき、相当力がついた時に、季節の変わり目で昼夜の温度差が急に大きくなる、木の根にぶつかるなどの刺激を受けた時、きのこを作った胞子をばらまくというこ

とです。日本にはこれから相当創造的な人が出てくると思います。学者として創造的であるには、子供の頃から豊かな経験を一度はしていること、それだけでなく逆境(貧乏)も経験していることが必要といわれています。日本はこの第一条件は満たされた、そして島に閉じこもっているかぎり外圧や自然災害などのショックも時々あるだろう、その逆境を経験して、これからの日本にはクリエイティブな人が出てくるだろうと楽観的だと思います。

現行建築基準法の建物全部つぶれていました。まず強い揺れ、そして東西南北に揺れたそうなんです。震災から五十日を越えて、被災者も被災しなかつた人も、この震災に関わつてきている人達は大なり小なり、心身症が現れてきていて、私もそういう状態です、誰もがそうなるということを今痛切に感じています。

この震災に関わる法律は、災害対策基本法、災害救助法、激震災害に対する法律、大規模地震対策特別措置法等があります。正直な話、地震の後で読みました。政治家の危機管理は全くできていなかったのです。企業家もその社員のために危機管理が必要なんです。

十月 小島 朋之
(昭和37年卒)
慶應義塾大学教授

◆曲がり角の日中関係

一九七二年九月田中首相が訪中して国交が正常化して以来二十数年、日中関係は全般的に順調でしたが、このところ厳しくなつて、曲がり角にきていると言えます。中国の核実験に対する日本の反応が今までと違つてきて、五月に無償資金供与を一部削減措置をとり、八月には無償資金協力の凍結をしました。

米国の言う分：日本は唯一の被爆国だが(ジュネーブの国連の軍縮大使も言うように)日本が戦争をしかけたんだから自業自得だ。また中国が戦争中に受けた被害額に比べると円借款はほんの少額なのだから、凍結などいらない。

心配なのは被災地の市民が、この震災で何を経験し何を考えた、足止めされればホテルに一泊、携帯電話は通じないし、電気、ガス、上下水道、電話等、線が繋がっていないのは全部だめでした。翌日は朝早くから歩きはじめたところ、レンタカーを借りられませんでした。八時に借りて実七時間かかって神戸に着きました。尼崎から先がひどい状態で、

点からお互いに必要としている等の要素があるからです。しかし悪化の可能性も依然として残されていると考えます。米国の中国に対する位置付け、政府の対中認識、対中政策が、友好国とも同盟国とも敵とも考えていません。中国の動向次第では敵国扱いに向かつていかざるを得ないところがあり、根の深い相互不信感があります。米国の対中政策の「エンゲージメント」が、今は、「関与」ですが、いつでもエンサークルメント「封じ込め戦略」に変わる可能性はあります。

東京から／福岡から

修猷館柔道部・剣道部 百周年記念
柔道部・剣道部の創部百周年の記念式典が十月二十九日(日)に母校で行なわれました。柔道はバルセロナで活躍した古賀稔彦さん(お兄さんが修猷の先生なので)などを招待し、模範試合や生徒達の五人がけ十人がけが行なわれ、午後には剣道部・柔道部と一緒に講義で物故者の慰霊式と懇親会と続き、卒業生、現役、物故者の家族と大勢の参加がありました。

修猷館茶道部講師の米寿を祝う
昭和二十四年から四十八年まで修猷館茶道部でお茶を教えた河内昌子先生の米寿記念茶会が十一月十二日(土)、福岡の大濠公園内の日本庭園にて、約五十名の卒業生により催されました。

合唱部同窓会の活動
修猷の合唱部は(クラブとして)昭和三十年代後半に成立したのだそうですが、当時の心熱き先輩方は東京に進学後も在京者の同窓会を春に恒例化して五月病の後輩をケアして下さったのです。今もずつと五月の第2土曜日の合唱部同窓会は続いており、二百周年の合唱からはその参加者にも声をかけて益々盛り上がりを見せています。

二木会忘年会
二木会の一年の締めくくりとして、昨年十二月十四日(木)「如水会館」にて有吉会長初め多数の出席をいただき、なごやかなひとときを皆で過ごしました。毎年十二月の二木会は忘年会ですから、もう今から今年の十二月のスケジュール表に書き込んでおいて下さい。

二木会講演内容

月		講 師	話 題
平成7年	1月	小川洋(昭和43年卒：通商産業省鉄鋼鋼業課長)	製造物責任法(PL法)について
	2月	広中平祐(数理科学振興会理事長)	あいまいについて
	3月	土肥隆一(昭和33年卒：衆議院議員)	廃墟の中からみる霞が関
	4月	瀬尾和大(昭和38年卒：東京工業大学教授)	阪神大震災の被害と今後の対応
	5月	有吉新吾(昭和4年卒：三井鉱山相談役)	私のアメリカ史
	7月	鳥栖建之助(大正14年卒)	原爆の功罪
	9月	中川八洋(昭和38年卒：筑波大学教授)	混迷の政治、不透明な世界、危機の日本
	10月	小島朋之(昭和37年卒：慶応大学教授)	曲がり角の日中関係
	11月	原口真智子(昭和45年卒：作家)	作者と作品の間にあるものは

若い広場

障害者福祉の現場から

平成2年卒

樋田千恵子



「知的障害者」この言葉が連想させるものはなんだろう。ノーマライゼーションという横文字が浸透してきた現在においても、彼らが地域で生活してゆくことはまだ困難であることには違いない。「決して差別をするつもりはないのだけれど……」と

前置きはつづののだが、「精神薄弱者」という用語が消えようとしている今も、人々の意識はさほど変わっていないのが現実のようだ。私は、東京都心身障害者福祉センターというところで、このような人々の様々なサポートをする職場で働いている。いわゆる最近クローズアップされている福祉の仕事なのだが……

みなさんは、施設というとうとういうところを想像されるだろうか？ 私たちがもれなく身近なところといえば、老人ホーム。これもひとつの施設である。近頃では公立でもかなり処遇が改善されているが、誰も好き好んで入りたいなどとは思わないだろう。当たり前だが、私たち一人一人にはそれぞれの個性があり、生きてきた様々な環境と歴史がある。ひとつ屋根の下で起床から睡眠までの生活のほぼ全てに規則が加えられ統括される毎日を、生活が保障されて

いるからといって喜べるだろうか？ 知的障害者の入所施設には老人ホームどころではない拘束がある。同じ大人なのに、外出するにも許可がいり、それが許されなかつたりする。電話もラジカセも自由には使えない。年ごろなら当然のことなのに、異性に興味を示そうものなら必ず記録に書かれ、ましてや恋でもしようものならケース会議のものである。日々の出来事の詳細を「歩行訓練」になり、「自立を目的に」服を着る。そんな大人がいるだろうか？ どう考えても大変な話である。そして、そのことを誰も変だとか嫌だとか言わないことがもつと変だ。

もちろん施設の全てがそうだと断言しているのではない。中には普通に近い生活形態をされているところもある。昔に比べれば建物は近代的になり、個室化するところも増えてきた。だが、やはり施設は施設である。誰だって住み慣れた環境で家族や友達と一緒に暮らす権利があるはずだ。どうして彼らだけが「仕方がない」の一言で塀の中にいなければならないのか。

学年便り 実践会卒業五十周年記念総会

野上三男



実践会(昭和二十年四年卒)では、毎年十一月三日を総会開催日と定めて、福岡に集う。今年も終戦五十周年。即ち我々の卒業五十周年という大きな節目に当たる。

卒業当時は人生二十年と思ひ定めていた仲間たちにとって、考えも及ばなかつた卒業五十周年の記念総会。この日全国から二日市大丸別荘に馳せ参じた会員六十名、夫人二名を加えた盛会となった。

総会に先立って、東京勢五名を含めた十四名が太宰府ゴルフクラブに集結、東西対抗のゴルフ戦で記念行事の口火を切った。夕刻からの総会では、恒例の議事のほかに各クラスから一名ずつが立って、この日の感慨、今

新旧幹事長あいさつ

新幹事長 田代 信吾

六月十七日の総会に於て、有吉会長より新執行部が任命されました。そのメンバーは下記の通りで、全員参加型で編成されています。

我々新執行部は当然のことですが、従来からの伝統ある東京修猷会の歴史に則って進めていく考えです。年一回の総会、会報の発行、毎月の二木会を中心に各行事を会員の皆様に楽しんで頂ける、待たれるものとする

ことに努めて行く所存です。二十一世紀へ向かつて、過去の伝統を生かしつつ、新しい息吹が感じられる東京修猷会とすべく、又会員の皆様の会となる様に心掛けて、事に当たっていきたくと考へます。どうかその意味でも各行事への皆様の参加と、御意見、提案をお待ちしております。

東京修猷会幹事長を終えて

長野 倬士

二期四年の幹事長の任期を終えるに当たって、さしたる貢献を成し得なかつたことを大変申し訳なく思っている。

私はその前の数年間は二木会も欠席がちになっていたが、その間、測上前幹事長以下の執行部によって会報の発行が始められ、会員数は飛躍的に増大していった。自分が幹事長になって痛感したことだが、測上先輩が払われた努力と負担は大変なものだったと思う。

ただ私は同窓会の運営というものは、負担がかかりすぎるのは望ましくないように思う。それで会報の広告掲載を取りやめ、ページを減らした。また六千人に膨れ上がった会員数を千人ほど整理した。

'95総会報告 修猷の文化を 白井信雄(昭和44卒)

今年も修猷会創立二十周年、戦後五十周年等節目の年でもあることから、従来とは少し趣を変え、総会に先立ち「修猷気質を養ふ」青春時代の我々を育んでくれた「修猷」の文化(修猷館気質)とは何か、またその継承は——をテーマとしたパネルディスカッションを組み入れました。パネリストには各年代の館友を代表して、有吉会長(昭和44卒)、船津館長(昭和32卒)、林幸次郎君(昭和50卒)、日本一のちんどん屋)及び外部から黄順姫氏(筑波大講師、修猷館を教育社会学の視点から研究)を招き、司会には我々の同期の青木裕子君(NHKアナウンサー)にお願

いし、思い出話などを交えて皆さんに修猷を大いに語っていただきました。

旗揚げ直前の細川さんに来てもらったことだ。当時はまだ「前熊本県知事」に過ぎなかつた氏に期待するところ大だったのか、学士会館の大部屋に溢れるほどの出席者があつたことが思い出される。功罪はともかく、何しろ一年後には総理になられる人と呼んだのだから鼻が高い。

ただ、私は二木会の一歩の価値は、このような講演よりも地味で難解な問題についての講演にあるように思う。特に国際問題について論じた我が同窓の論客達は全員、そこらのテレビや新聞と違つた極めて現実的で鋭い視点を持っていたのが強く記憶に残っている。

最後に私にとつて心残りだったことは、財政の安定化を果たしえなかつたことと総会出席者の減少傾向に歯止めがかけられなかつたことだ。この件についてはぜひ皆で田代君を助けて改善を図ってほしいものだと思つている。

在任中一番の思い出は、二木会の四百回記念講演で日本新党だきました。

有吉会長からは修猷に沸々と流れる「修猷魂」を産んだ修猷館の歴史を語っていただき、修猷館の校訓は「修猷の歴史そのもの」と歴史と伝統による生徒教育を通じて二十一世紀の日本を担う人材の育成を熱く語る船津館長。修猷館時代のプラスバンド部の体験を生かしチンドン屋業界の第一線で活躍中の林君が語る「自分にとっての修猷」。そして修猷館の自由な校風をこよなく愛し「修猷の伝統は運動会を体験することで継承されるのでは」と問ひかける美しき新鋭学者黄氏。名司会青木君のもと、時には黄氏の巧みな博多弁に笑ひも飛び出す等会場は熱気にあふれ一時間あまりの討論が行われました。

館歌斉唱で始まつた懇親会では、飛び入りで上京中の桑原福岡市長(昭和15年卒)から8月にユニバシアード福岡大会を控え

新執行部

幹事長	田代 信吾 (S35年卒)
副幹事長	今村 宏明 (S35) 二木会
	伊藤 洋子 (S35) 会計
	大須賀頼彦 (S37) 会計
	田中 俊雄 (S40) 名簿
	棚町 精子 (S40) 会報
	高橋 章 (S41) 名簿
	黒宮 時代 (S41) 会報
	広瀬 豊 (S43) 総会
	伊佐 裕 (S44) 二木会
	等 健次 (S45) 総会

事務局便り

平成七年度の東京修猷会総会は、新しい試みのパネルディスカッションが好評で、華やかに幕を閉じましたが、その折、幹事長の交代と新しい幹事が承認されました。これを機に、今まで一部の事に片寄りがあつた会の運営を見直そうというところで、役割の分担を明確にし、全員で協力し合う体制を取りました。

そして、組織運営の簡素化、明朗化を目指しての試行錯誤の末、東京修猷会事務局業務の一部を株式会社フソウキャリアサービスに委託し、事務局もそこに置く運びとなつたわけです。すっきりしたところで、幹事一同、大切な会費をより有効に活用すべく努力する所存です。よろしく御願い致します。

ここで一つお詫言があります。

現在、年会費の支払い方法としては、郵便振替が主で、他に、総会、二木会での直接払い、修猷カード、そして銀行口座自動引き落としと様々ですが、このうち銀行口座自動引き落としを中止させて頂くことになりました。この方法でお支払いの方々は真に申し訳ありませんが、引き落としにかかる費用が法外な上、手続きが複雑なため、中止やむなきに至りました。

該当の方には改めてお手紙を差し上げますが、まずは紙面を借りて深くお詫言申し上げます。なお事務局へのご提言、ご要望、ご不満などありましたら、何なりとお寄せ下さい。

編集後記

不備な点も多々あるかと思いますが、御協力下さいました皆様ありがとうございます(カット・矢島想月)